

釣りに釣られて

高原英夫

第二十回「今日は俺の命日か」

十年ほど前の話になる。今では、戻ってきたマグロの漁のためにほとんどやらなくなってしまうのだが、当時、十月といえば竜飛の沖には数十隻のタイ釣りの船が煌煌と明かりを放ち深夜の海峡に浮かんでいた。

秋も深まり十一月ともなると西風が吹き始め、例えば十回タイ釣りを予定したとしても、二、三度もやれば御の字で、風と休暇の両方がうまく折り合うことはそうあることではなかった。

そんな日のこと、二、三日後は天候も良さそうだと、例のNさんからの電話があった。すぐさま「行く」と答え、会社へも事前に休暇を申し出た。もうその時から、いつでもある程度の準備はしてあるとはいえ、テンテンは足りているが、テグスは大丈夫かだとか、いきなり釣りの興奮の渦に投げ込まれることになる。すぐにも釣り具店に走り、買い込まなくてはと気が逸った。

とはいえ、よくあることだが、前日になっても、はつきりした連絡がなく、準備

は万端整え、あとはイソメをこれほどまでもかというほど買うだけにし、当日となった。Nさんとは何度か電話で連絡を取り合ったのだが、いまひとつぱつとした天気でないとのことだった。

タイ釣りは午後の二、三時頃青森を出発し、五時頃には船に荷物を積み込み、仕掛けを準備し、出船する。

だから、休みをとったその日の出発までのたつぷりある時間は、期待やら天候やら、準備に怠りはないかなどなど、それでも長く感じられる時間が、余計にも長くてゆつくりとしか進まない。やっとNさんから昼過ぎ連絡が入った。ただ、やはり、「やれるかどうか微妙だが、ともかく来てくれ」という船頭さんからの知らせだというのだ。

確かにそれまでも、そんなことは竜飛に限らず何度もあった。船に乗り込み、ロツドキーパーに竿をガチンと据え付け、風が止むのを待ちながらも、結局は中止したことが、二度や三度はあったし、その場に行ってみなければわからないことが多いことはよく知っているつもりだ。

話は少しわき道へそれてしまいが、こんな事もあつた。六人で津軽半島方面で船釣りをすることにし、深夜、青森の中心街の駐車場へ集合することになつていた。私は時間に合わせて起き、外に出てみたのだが、星も見えず、風が木の枝を揺らしていた。時折電線がヒューと鳴る音さえ聞こえる。しかし、中止の連絡はない。な以上、集合場所へと向かつた。すでに何人か来ていた。その場所はビル風が巻き、さらに様子は厳しく見えた。

「今日はダメだな。それにしても船頭からは連絡もないしなあ」

みんなが集まり、いざ出発だというのに、どこか腰が引けた話ばかりになつていた。ともかく一度船頭に電話を入れ、それからにしようということになり幹事役が連絡を取ると、間髪入れず

「来いだよー」

誰ともなく顔を見合わせた。これまでも、青森がこのくらいの風なら、目的地はもつとひどいことなど何度も経験している。「まさか」といいながらも二人ずつに分乗し、車を津軽半島へ向けた。一時間以上はかかる。着いてなんの事はなかつた。

やつぱり船は出せなかった。港で少し様子を見ようなどという甘い天候ではなかった。私はこの船頭はこちらからの電話を枕元で取り、表へ出て外の様子を見もせず、「来い」と言ったのだと思った。万が一、一時間でも乗せて、釣りどころではなく波を浴び、ずぶ濡れになって、「やつぱりやめよう」というものなら、そのまま船賃を堂々と要求するコスカライそんな人物にさえ思えた。実際、そんな事もあった。確かにプロの船頭からすればどんな時でも船は出せるのかも知れない。しかし我々は素人で、腕がいいの悪いのといっても所詮遊びの話だ。命懸けという訳にはいかない。観天望気と出漁の可否は、船頭に任せているわけだし、「来い」といわれ港に行つてはみたものの割り切れなかった。完全に弄ばれ、船代の穴埋めにされている。そんな思いで帰りの車の中はいつになくキツイやりとりになった。

さて、Nさんが私の家に寄り、釣り道具を積み込み竜飛へと向かった。いつものことだが、途中の車の中では風の強さの話になる。というのも雨もいやだが、波の高いのもどうもいけない。出来れば風速は六メートル以下、波の高さは一・五メートル以下でなくてはならない。当然、船酔いなどはしないのだが釣りの風情を波は

あつさりふつとぼしてしまふ。第一、釣りに集中できない。木の枝が揺れるようではもう風は相当ある。商店の前などにあるのぼり旗を見るのが一番いい。旗がゆらりともしない、そんな日がベタ凧で、車の中では、「今日はいいぞ」と気持ちは一層の興奮度を加える。

その日は、まあなんとかなりそうだという風が吹いていた。しかし、それは津軽半島の東側を走っている時の車から見える様子であつて、海峡に突き出て、西風をまともにくらう場所の予測はできない。竜飛に到着した。Iさんは船に乗つて準備をしていた。

「一応、道具降ろして。ただちよつと天候を見るからな」

実はその日は私とNさん二人だけのタイ釣りだった。すぐ支度を始めた。船には明かりが点り、手元を照らし、あたりは薄暗くなつていたが、手元が明るい分だけ余計に暗く思えた。

しかしIさんは、あくまでも風を見ていた。船上にはためく旗、岸壁の外に見える波の大きさ、竜飛灯台から流れてくる気象情報などなど、頭の中で渦巻いている

のは間違いなかった。確かに、その日、沖には船の明かりはひとつも見えず、港で船に乗り込んでいるのも我々だけだった。

そんな時、沖を西へ進む漁船が見えた。すーっと揺れている様子もなく進んでいる。あとで知ったことだが、その船には青森の安方で釣具店をし、ラジオにも出演し、釣りの話をしていたNさんが乗っていたのだった。

Iさんは、「よし」と小さな合図をし、ついに出船となった。竜飛を出て、南東へ少し下る。竜飛の岬に何基も据えつけられた風力発電の羽根が、オレンジ色にライトアップされて独特な夜の海からの風景が見える。釣り場まで何のことはなく着いた。何をそんなに心配していたのだろうかときえ思った。

そして、二、三度だったか、仕掛けを海に降ろしては上げたが、アタリはまだない。そんな少しの間に北海道の松前半島をすっぽりと覆う真黒い雲の大きな大きな固まりの中に、ボツ、ボツと光るものが見えた。というより、その光が黒い雲の大きさを内側から知らせているという方が正確だろう。稲妻なのだが、あの毛細血管のような細かな枝など見えているわけでもなく、雷鳴など聞こえもしなかった。しか

し、Iさんはそれを見るなり、

「上げて、戻るぞ！」と大きく叫んだ。

「あれがすぐ来る」

今、雨が降っているとか、風が吹き始めているとか、まだ何の荒れる兆候もないのだが、Iさんのただならぬ声に急いで道具を片づけ始めた。

すぐに竜飛に向かったのだが、西からの風がどんどん強くなってきた。波はその風のまま高く大きくなり始めた。少しでも重心を低くしようと、両手で船べりにつかまり、床に座り、さらに頭を下げた。波は真横からいまにも崩れ落ちんばかりに目の前にそそり立ち、船は左舷が四十度も立ち上がっているだろう。波に飲み込まれてしまう。恐怖心が波の数だけ次から次と襲ってくる。今日で終りかと観念した。はじめは道具箱やクーラーが船上をあちこちと滑るのを手で押さえていたのだが、その余裕もすでになく、クーラーは勝手にズズーと音を立て滑り走り回っている。船は波のてっぺんまで登ると今度は右舷が立ち上がり、体が前につんのめり海に放り出されそうになり、足を踏んばる。Iさんは、舵を取るのに懸命だ。見たことも

ない形相で目を凝らし波を見分け船を港へ進めていた。

さあ、あとは東へ舵を切ると港という所まで来た。船は追い風と追い波に今度はサーフィンでもしているかの様だ。シーソーの様に前にいたNさんと後ろにいた私は交互に高く上り、そして一瞬無重力状態になり下つ腹がすくむと、船底がバツタと大きな音を立てて海面を叩き、落ちた。ただ横波の時と違い、安全に思え、安堵感が広まった。ただクレーラーと釣り道具は変わらず船の前へ後へと思いつ切り滑り回っていた。船のスクリューが時折空回りし、ガラガラと音を立てている。すっかり波に乗り、スクリューが丸出しになっているのだ。あとで知ったことだが、実は横波よりも旋回中のこの状態が最も危険なのだという。横波の場合、船は底を海につけている。しかし追い波の場合、わずかしが船が海に漬かっている。重心がやたらと高くなっているのだ。そういう時にコテツと転ぶのだそうだ。その頃はそんなことも知らず、あと少しに見えている港を前に、命を拾ったときさえ思った。そしてピタツと波のない港に入ると、互いに顔を見合わせた。緊張の、大きな重い荷を降ろし、ふうーとため息が漏れた。

今でも、Iさんは、その時のことを思い返し、

「あの時は、おっかなかったなあ」と、ニヤツと笑顔を浮かべて言うことがある。慎重極まりないIさんにしても、そんなことがあるのだ。そして私も命の崖っぷちを経験した。

自然は人間の想いで動いてはいない。自然には意思はないのだ。人間の命などどうでもよく、まさに自然のままに時を重ねているのだ。自然とつきあうことは、人間にとっての都合のいい解釈だけでできることではないと身に染みだ一日となった。

平成23年9月